「もしイ・ジェミョン！」どうなる日韓関係？

堤　一直

一般社団法人・東北亞未来構想研究所 理事

**石破首相が共感する「近代日本の暴走」**

昨年末の尹錫悦大統領の弾劾訴追案可決をうけ、日本で李在明議員が次の大統領になった場合の日韓関係を懸念する声が高まっている。だが、仮に両国が石破・李在明の新時代を迎えたとしても、日韓関係は予想されているほど悪化しないだろうというのが筆者の考えだ。

その根拠は、石破首相の歴史認識である。例えば、2024年8月の自著『保守政治家―わが政策 わが天命―』において、石破首相は星亮一の小説『山口多聞―空母飛龍に殉じた果断の提督―』の以下の部分を引用している。

『明治という国のゆがみが一気に噴き出たんだ。無理に戦争を起こし、長岡や会津に攻め入り、略奪の限りを尽くした。そうして出来上がった明治国家が暴走したんだ。人の苦しみが分からない、そういう国をつくったんだ。俺は蒋介石の気持ちがよく分かる。』

「無理に戦争」と書かれているが、これは江戸から明治に移行する激動の過程で起きた内戦を指している。薩摩藩と長州藩が中心となり、天皇の復権を大義名分に掲げて幕府を滅ぼしたが、当時幕府側として戦った長岡藩や会津藩の人々は、戦後敗者として過酷な処置を受けたのである。

この会話の語り手は太平洋戦争開戦時の日本海軍連合艦隊司令長官である山本五十六であり、聞き手は小説の主人公である山口多聞である。空母飛龍の艦長である山口は、1942年のミッドウェー海戦でも善戦した。石破首相は「小説ですから実際にこのようなやりとりがあったかどうかも定かではありませんが」と言いながらも、この部分を引用し、共感しているのだ。

**徳川家康に学ぶ**

同書『保守政治家』で石破首相自身が語った以下の部分も、興味深い。

『「台湾は親日、韓国・北朝鮮が反日なのは、朝鮮人が忘恩の徒だからだ」的な暴論を今でも時折耳にしますが、それは根本から誤っています。』

『朝鮮出兵で極度に悪化した朝鮮との関係を修復するため...徳川家康はたびたび李氏朝鮮に使者を送り、通信使の来訪を懇請し...徳川家康の深い洞察に学ぶべき点も多いと思います。』

　石破首相は、明治以降の「近代日本の暗」を直視し、その過程で起きた日本の朝鮮半島、中国での行為を侵略として認識しているようだ。江戸幕府と朝鮮王朝の交流についての評価も見逃せない。抑圧的な封建体制としてそれぞれ批判されることも少なくないが、約250年間、日本と朝鮮半島の間で平和が維持されていたのは事実である。

ここまで、2024年8月の石破首相の著書から歴史認識を考察した。出版時期を考えると、事実上の首相選挙である自民党総裁選挙を意識して書かれた可能性もある。だが、石破首相の著作を遡って見ていくと「近代日本が国外にもたらした暗への反省」は総裁選以前にも確認できる。

例えば、2014年の『日本人のための「集団的自衛権」入門』 でも以下のように述べている。

『集団的自衛権行使の議論をする際には、我々は２つのことをすべきである、と私は常に言っています。それは、「先の戦争の検証」と「中国や朝鮮半島のみならず、フィリピンやシンガポール、タイ、インドネシアといったアジアの国々へしてきたことの検証です。」

石破首相の歴史認識は少なくとも約10年間は一貫しているようだ。

**安倍対石破　対照的な歴史認識**

石破首相の歴史認識は、彼のライバルであった安倍首相の歴史認識とは異なる。この違いに関しては、安倍首相逝去後2023年2月に出版された『安倍晋三回顧録』が参考になる。

例えば、同書で安倍首相は『今の時代の価値基準で、過去の侵略や植民地支配を断罪するのは無理がある、という考え方ですか。』というインタビューに対し、ロシアのクリミア侵略を非難した2019年G7サミットでのジョンソン英国首相の発言を以下のように評している。

『ジョンソン英首相は『侵略という言葉を軽々しく使わないでほしい。英国は歴史上、今の世界の４分の１の国を侵略したんだ』と言っていました。歴史学者のジョンソンはさすがですよ。」

ジョンソン首相を「さすが」と評価するような安倍首相自身の歴史認識と、側近のそれとが相まって、2015年の第２次大戦後70年談話で「日露戦争は、植民地支配下にあった多くのアジアやアフリカの人々を勇気づけました。」という、韓国人には受け入れがたい発言が出たのだろう。

安倍首相とは対照的に石破首相は、「近代日本が国内外にもたらした暗」を意識し続けてきた政治家のようだ。防衛政策に精通しており一見タカ派に見えるが、首相在任中に靖国神社に参拝する可能性も低い。ならば、李在明議員が大統領になり日本の過去に対し厳しい姿勢で臨んだとしても、石破政権との関係は大きく悪化しないと筆者は考えている。